

HonoBono Tea ceremony



ほのぼのクラブ第5回目は茶道教室です。
裏千家の新宗楓教授が一碗のお茶を皆様に召し上がっていただきます。

茶道の精神を一言で表した利休の言葉に和敬清寂（わけいせいじゃく）があります。和は互いに楽しもうという心、敬は他を敬愛する心、清はまわりも自らも清らかでありなさいという教え、寂は要らないものを捨て去ることで生まれる寂靜を表します。

この機会に茶道の心を体験してみませんか、、、

場所 トロント仏教会
日時 2015年9月20日午後2時
お一人 5ドル

私達の家族 犬猫 動物に感謝する法要

10月18日（日）午前11時
ゲストスピーカー
南アルバータ仏教会
泉 康雄先生

貴方の大切な家族の一員である犬や猫の
写真を持ってきてください。仏さまの光
を共に受ける家族のための法要です。



敬 弔

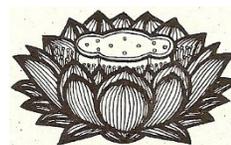
次の方が御往生されました
生前のおもかげを偲び、謹んで敬弔の意を表します

藤井 トージ様 八十五歳

六月二十三日往生

樋高 キャシイ様 七十歳

八月十五日往生



康的に上手に繊細に取り入れていきます。私が、店のご主人にこれは日本でしか食せないですね、と言うと、お仕事は海外ですかと尋ねられました。トロントで開教使をしていると伝えるとカナダで浄土真宗があるのかと驚かれました。どんな仕事が具体的にどのか、お葬式ですかと尋ねられたので私はお寺の仕事を伝えました。日曜日ごとにサービスマンがあり、メンバーが積極的にお寺のイベントに家族ぐるみで参加していると言うと、ご主人は都会でなくてもこの辺でもお寺といえはお葬式か法事でただ儀式をやって終わり、お葬式に關してもあのお寺、あのご住職を呼んだらいくらかかるとかさんなもので葬式自体もリードするのは葬儀屋で住職はお経を唱えて終わりと言っていました。そこで私は改めてトロント仏教会の存在の素晴らしさに気づきました。お寺ではいろいろな活動があり日曜日のサービスマンを通してメンバーが一つの家族のように交流している、多分にこの形はクリスマスチャンの形式を差別から隠すために取り入れたものかもしれませんが日本にはないお寺の独特なあり方になっていて日本からのお寺の単なる継続ではなくカナダ独自の展開をしていると思います。私たちは阿彌陀様の智慧を学びながら人間関係を作りこうして生活していることの素晴らしさに気づくべきでしょう。私は祖母にあった時のやるせない気持ちがかすりと消えて行くような感覚に襲われました。それはトロント仏教会のことを誇らしげに説明したからだだと思います。私もカナダでトロント仏教会の素晴らしさから家族の一員として仕事をさせていただけにいるという嬉しさからだと思います。

合掌 駐在開教使 遠藤竜平

ご門主様とご一緒できたわくわくの日

五月二十七日水曜日、私はここでひらかれる帰敬式に参加できる名誉に与りました。

本願寺のご頭首であられるご門主様を取り仕切る行事です。ご門主様がいらっしゃる前、

私はいくつかわからないことがありました。

「ご門主様はどういう方かしら？」

「お若い方かしら、それとも中年でいらっしゃるのかしら」
「何をお召しになっていらっしゃるのかしら？ スーツ、それとも法衣？」

そして一つ、

「ご門主さまにハイファイブってできるかしら？」（ハイファイブはカナダでの仲間同士のあいさつ的一种）

「どんなふうにお話するのが礼儀なのかしら」

私はご門主様についてできるだけたくさんのご意見をグーグルで検索しました。しかしながら、情報は限られたもので、その場の雰囲気にかせようと思いません。

ご門主様のご到着の日、お寺のメンバーがピアソン国際空港に集まりました。皆が今か今かとご到着を待っていると普通の黒のスーツに身を包んだ若い青年が現れました。

私の第一印象は

「私の弟より痩せている方だわ。あら、私の歯医者のアヅマ先生に似てらっしゃる。」

でした。私たちがご門主様の周りに集まると、青木総長が丁寧に私たち一人一人を紹介して下さいました。握手はありませんでしたが、ご門主様とご一緒できること自体とても名誉なことだと、感ぜずにはいられません。空港へのお迎えは本当に短い時間でしたが貴重なひとときでした。

帰敬式はお寺で行われました。ご門主が本堂に入場されるに先立って儀式についての概要が述べられました。すると私はいつお辞儀をしたらいいか、いつしたらいけないか、突然不安になりました。

帰敬式は、順調に取り仕切られ、いわゆるカナダ人が言うところの「Without A hitch」（順調に、滞りなく）でした。

ご門主の穏やかな存在感に儀式の間中私を落ち着かせ、同じように穏やかな気分にならせてくださいました。

この特別な日、私は感謝と清らかな喜びに満たされてお寺を出ました。この儀式に参加できたことは時間がたつにつれ、報恩の念として私の中に深まってきています。

そして、父のこと—— 幼いころから仏教の教えに基づき私を育ててくれ、お念仏の教えに沿う様導いてくれた父にとっても感謝しました。

このように信仰をかためることは私にはとても意味深いものです。ありがとうございます。

ナオミ タマキ

佛心

二〇一五年九月号
浄土真宗
トロント本願寺

蟪蛄は春秋を知らず



夏休みを利用して一年間二ヶ月ぶりに日本に休暇で帰ることにいたしました。何よりも日本に帰りました理由は九十二歳になる祖母に会うことでした。こうしてカナダで一年間生活をして沢山のことを経験し学びました。カナダに来る前も日本を離れて旅行等いろいろな国を訪れる機会があったのですが、仕事も含め、生活の拠点を日本以外の国に移すことは初めてでした。私の視点が日本という国からだけからしか見ていなかったことがつくづく分かりました。そしてそれ以上にカナダで生活することで違った視点を持ち日本という国、私の生まれ育った国を良い点、悪い点より深く分かったと思います。

この休暇は日本の最高に蒸し暑い期間なので軽井沢や蓼科の高原の家で過ごしました。様々な草花の香りが溶け合った高原の森林の木陰の道を歩いていると夏ゼミの声が聞こえてきます。

浄土真宗の七高僧の第三祖曇鸞大師はその著書『往生論註』で夏にちなんだ比喻をしています。「蟪蛄は春秋を識らず、この虫あに朱陽の節を知らんや」こうしてうるさいぐらいに元氣良く鳴いている蟬の声を聞いてみると想像も出来ませんが皆様もご存知のように蟬の命は地上に出てからはわずか一、二週間ほどなのです。七年間の地中での生活から解放されて羽をもたって飛び回れる命はわずかなのです。ということはセミは春も冬も秋も知らないのです。春や秋を知らないセミは、夏が四季の中の夏であることも知らないのです。

つまりこの句の意味するところはセミは春や秋を知らない、だから夏も知らない。つまり迷いの世界しか知らない者は、さどりの世界が分からないだけでなく、迷いが迷いであることも知らないのです。煩惱を自分の力では克服できない私たちは、煩惱の世界から抜け出た仏様の智慧に出会いそこから自分が自我、我執に縛られていることに気づき、もっと大きな見方ができるようになる、これがお念仏の世界ではないでしょうか？

久しぶりにあった祖母は春にヘルペスを患ったと聞いていましたが、想像以上に弱っていました。私はなんとも言えない、さみしい、悲しい、不安そのどの言葉でも一言ではあらわせない、れない感情に襲われました。自分が一番愛している家族が自分の不在の間に消えてしまうことに対する私の反応だったのでしようか。僧侶として仏教を学び、無常の事実を説いていましたがやはり我が事としては受け止めていられなかったのです。人間は必ず死ぬ。盛んなるものも衰える。祖母と過ごした楽しい時も永遠なものではない、儂いものなのだ。今は元気な他の家族も衰える時が来る。今の楽しみは儂いものなのだ、と無常の事実の前に私は暗い気持ちになっていたので。

母が面白いレストランがあるのよと土手料理と称する料理屋に行きました。土手料理といってもみなさんピンとこないと思います。そこではいわゆる野菜を料理するというのではなく田んぼの畔にある踏みつけているような雑草や森にある野草を料理してだしてくれるところでした。紫蘇のジュースから始まって蕎麦の実やいろいろな面白いものが出てきました。一つ一つが思いがけなく新鮮な味がして驚きました。例えばズッキーニの小さな花のついた天ぷら。そうそうヨモギの葉の天ぷらなど苦味の中に菊にも似た味わいがあるほどと感心させられました。母が春に来た時はタンポポの根の天ぷらがとても美味しかったそうです。広大なカナダの人から考えれば日本はとて小さい島国でうっかりすると海にぼチャリと落っこってしまいそうと考えても不思議でありませんが本当に沢山の食べ物健康